

## 北海道伊達高等学校

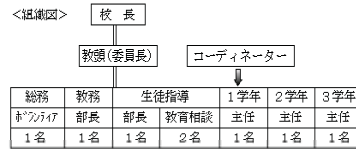
課程 全 日 制  
 学 科 普 通 科  
 生徒数 494名

### 1 取組の特徴

きめ細かな集団カウンセリングやボランティア活動などの体験的な学習を展開し、生徒の人間関係を形成する能力やコミュニケーション能力を高めるとともに、自己有用感を育成するための指導の一層の充実を図る。

### 2 取組のねらい

- 1 教員の集団カウンセリングの指導力の一層の向上
- 2 学級環境適応調査（学校環境適応感尺度：アセス）結果のより効果的な活用



### 3 取組の経過

- |  |  |
|--|--|
| <p>【4月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集団カウンセリング（1学年 宿泊研修）</li> </ul> <p>【5月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第1回「学級環境適応調査」実施（アセス：全学年）</li> </ul> <p>【9月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第1回ピアサポート活動（希望生徒）</li> </ul> <p>【10月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第2回ピアサポート活動（希望生徒）</li> </ul> <p>【11月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第3回ピアサポート活動（希望生徒）</li> <li>・ 第2回「学級環境適応調査」実施（アセス：全学年）</li> </ul> | <p>【12月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 異世代交流（3学年主体）</li> <li>・ 第4回ピアサポート活動（希望生徒）</li> </ul> <p>【2月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第3回「学級環境適応調査」実施（アセス：1・2年）</li> <li>・ ボランティア活動（2学年主体）</li> <li>・ 生徒理解のための教員研修</li> </ul> <p>【3月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集団カウンセリング（1学年主体）</li> </ul> |
|--|--|

### 4 取組の内容

- 1 宿泊研修における集団カウンセリング
 

ア 日 時 4月15日（金）

イ 対 象 1学年生徒

ウ ねらい お互いを認め合い温かな人間関係を形成するための取組を通して、心と心の触れ合いを深めさせるとともに、望ましい集団づくりへのきっかけとする。

エ 内 容 クラス単位によるエクササイズ（アウチ、じゃんけん列車、パスデザイン、隣の隣、さいころトーキング、二者択一）

オ 成 果 ①「楽しくできた」「ためになった」「友達の見聞をじっくり開けた」「自分の意見を伝えられた」などの事後アンケートの項目に対して、肯定的な感想が、いずれも7割を超えた。

②楽しんでだけでなく、話をしたことのない生徒同士の交流が深まるなど、友人関係づくりのきっかけとなった。

③生徒自身が、コミュニケーションのさまざまな手法を会得できた。



- 2 第1回ピアサポート活動
 

ア 日 時 9月26日（月）

イ 対 象 希望生徒及び教職員（参加者：生徒12名、教員4名）

ウ ねらい ①生徒同士が互いに助け合い、支え合えるような人間関係を醸成する。  
 ②仲間を支援する活動を通して、自主性、社会性、コミュニケーション能力を育む。

エ 内 容 ③思いやりに満ちた関係を築ききっかけづくり  
 じゃんけんインタビュー・トランプチェーン・質問競争・難破船

オ 成 果 ①人間関係を広げる場として有効であった。  
 ②活動を通して、自己表現力を高めることができた。  
 ③学年を超えた交流を図ることができた。
- 3 異世代交流
 

ア 日 時 12月7日（水）～12月14日（水）（クラスにより異なる）

イ 対 象 3学年生徒

ウ ねらい 高齢者との交流を通して、コミュニケーション能力や自己有用感を高める。

エ 内 容 ①本校での実施～輪投げ、パークゴルフ、合唱など  
 ②施設での実施～レクリエーション、テーブルゲーム、合唱など

オ 成 果 ①次第作り、役割分担、贈り物製作、合唱の練習等、準備の段階から当日まで、今までとは違い、協力して真剣に取り組む姿が多く見られた。  
 ②個々の生徒が持つ良さを発見することができた。  
 ③人のために尽くすことで、クラス全体が笑顔に包まれ、達成感を共有することができた。  
 ④高校生活の締めくくりとして、コミュニケーションの大切さを改めて実感する機会となった。



### 5 次年度に向けて

- 1 成果
 

ア 学級環境適応調査の結果

	1学年：前 回	2学年：前 回	3学年：前 回
生活満足感	50.1	51.0	52.7
対人的適応	52.1	51.4	54.9
学習的適応	51.5	52.8	52.4

①1学年は、生活満足感及び学習的適応が低い傾向にあることから、進路指導などによる目標づくりなどに重点を置く必要がある。

②2学年は、見学旅行の充実感がそのまま数値に反映された結果となり、すべての項目において上昇した。

イ その他の指標による評価  
 ボランティア活動への参加生徒の増加（のべ人数H22年度34名→H23年度44名）

ウ 生徒の変容した姿  
 ①集団カウンセリングやボランティア活動（異世代交流）等の体験的な活動を通して、人間関係を形成する力やコミュニケーションスキルが身に付いた。  
 ②生徒の自主的な活動において、生徒が企画立案し、協力して取り組むことができるようになった。（2学年レク、3学年異世代交流など）
- 2 課題
 

ア 入学してくる生徒が毎年異なることから、生徒集団に応じた体験的な活動を用意する必要がある。

イ 支援が必要な生徒も多いことから、個々の生徒の状況に応じた指導方法の一層の工夫・改善が必要である。

ウ 本実践の各取組の学校評価の結果が次年度の分掌等の重点事項に反映されていない。
- 3 次年度に向けて
 

ア 年度当初にアセスなどの各種調査を活用して生徒集団の特性を把握し、専門家と連携して、効果的と考えられる活動を設定するなどの工夫する。

イ 支援が必要とされる生徒に対してはケーススタディを行い、サポートチームを編成してきめ細かく対応する。

ウ 学校教育目標の実現と「生きる力」の育成を図る観点から、本実践の各取組と他の取組の組織化・系統化を図る。